



第14回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

移る世が映し出す日本の在り方

徳島県・徳島市立高等学校 1年 澤田 晴奈

私が住んでいる徳島県は海に面しており、昔から海運で栄えてきたと聞いています。阿波水軍が平家から源氏についたことが一因となり、結果的に平家の滅亡につながったことも習いました。また作家の司馬遼太郎氏は『街道をゆく 阿波紀行、紀ノ川流域』の中で江戸時代に鳴門の漁民が「テグス」を発明し、瀬戸内から九州へと出かけてそれを売り込んで一本釣りの技法を広め、漁獲量に一大革命を引き起こしたことを紹介しています。そういうことを知っていたので徳島と海とは切っても切れない関係で「海とともに生きている」街だと漠然と思っていました。ところが現実には港を行き来する船の数は減り、人を運ぶフェリーも本州と橋でつながった後には阪神方面行きを中心にそのほとんどが消えていってしまいました。その後、この街で育った私は昔の映像フィルムで当時の繁栄を知るだけで、正直なところ、海とのつながりにあまり強い実感を持ってませんでした。

中学生の時に鳴門市の「福永家住宅」という建物に家族で行ったことがあり、そこで初めて海と徳島のつながりをこの目で確かめたように思います。江戸時代にこの地で塩田業が盛んになり、製塩で莫大な財を成した福永家が建てた昔の豪邸です。入浜式塩田の仕組みもよくわかり大変勉強になりました。その後、日本の各所に散らばる旧家と呼ばれる住居を何度か訪れるようになりました。例えば「にしん御殿」の愛称を持つ北海道小樽の「旧青山別邸」とか、NHKの朝の連続ドラマ「花子とアン」で有名になった筑豊の炭鉱王「伊藤伝右衛門」の邸宅など、全国にその時代の贅^{ぜい}を尽くした旧家が無数に点在しています。いろいろとそれらの名所を訪れているうちにある共通点に気づくようになりました。それはその財の源になった産業が今ではすっかり斜陽化してしまい、かつての栄光を物語る記念碑のようにそれらの建物が残されているということです。多くの人間を雇い入れ、たくさんの物を作り出すというより原料から必要な物

を採取する産業が成り立っていた明治から昭和の初期の時代の流れを感じるようになってきました。

どんどん儲^{もう}かって仕方がなかった時代にその財を誇示する目的で建てられた大邸宅も、数世代後には維持する資金が枯渇し、展示物として一般に公開されるようになったというのが本当のところでしょう。機械による化学式製塩法の発達で塩田の必要性は無くなり、海の恵みである「にしん」はある時期を境に海流の流れが変わって漁獲量が激減し、石炭は石油にその地位を奪われてしまいました。自然や産業構造の変化が始まると、今までの常識的な手法は次第に通用しなくなり、手をこまねいて傍観しているうちに衰退が始まっていきます。成功体験にしがみついていたのはトップランナーであればあるほど、その傾向が強くなってしまいます。逆にそれより低い立場の人は危機感がより強い分だけ、真剣に他分野からの浸食に目を向けるのだと思います。ここに大逆転の要素が存在します。衰退していく方法に見切りをつけて新しい技術を取り入れる、あるいは隣接する他の分野に乗り込んで新しい市場を開拓していく。それができた会社が生き残り、長く続くことになるようです。私の地元にもそのような例が存在します。その会社も当初は塩田での製塩が主な仕事でありました。しかし、その技術を活^いかして医療用の輸液を作り始め、その後は製薬企業として飛躍的な発展を遂げ、今では地元を代表するグローバル企業に成長しています。

創意工夫で生み出された産業もある期間の独占の時期を経て、新たなイノベーションの前に市場からの退場を迫られる運命となります。そして歴史は常に繰り返されます。このことに気づくか気づかないかで将来の命運が分かれるような気がします。中韓を始めとした新興工業国の追い上げにより、全く元気の無い今の日本の家電業界を見ると、それがよくわかります。電話といえば固定電話しか考えることができなかった父母の若い頃。でも今では携帯電話、しかもスマートフォンが当たり前の時代です。テレビでいえばブラウン管しかなかった時代が過ぎ去り、薄型液晶テレビが基本となり、さらに様々な高性能テレビが次々と開発され発売されています。そして液晶テレビの王者とつい最近まで見なされていた国内の大企業が苦境に立たされています。

かつての繁栄^{しの}を偲^{しの}ばせる遺構を見るのは懐かしい気持ちと同時に寂しい気持ちに私をさせます。栄枯盛衰は平家と源氏の時代からの教訓ではありますが、

逆にそこから学びとれることもたくさんあります。常にその分野をかすめてくる新しい流れがないかとアンテナを張り続けること、そして今持っている技術が他の分野で新しい形として応用できないかと考え続けることです。明治から昭和の初期に比べ、現代は目まぐるしいスピードで時代が動いています。経済に国境が無くなり、地球の裏側の出来事がただちにこちら側にも影響を与える時代です。ひとつのものが繁栄できる期間は昔より極端に短くなっており、後世に栄華を物語る遺構さえ、もはや残せないのかもしれませんが。ドラマ「下町ロケット」で有名になった言葉「キーデバイス」。基幹となる唯一無二の技術を作り上げ、世界標準規格を確立することがその事業に長き繁栄をもたらすのではないのでしょうか。

アルフレッド・ノーベルの伝記を読んだことがあります。ノーベルが成功したのは従来、状態が不安定で不意に爆発するリスクがあった黒色火薬を安定した状態で保管する技術を開発したこと、すなわちダイナマイトを誕生させたことです。それが事業に使われた時は人々の生活を便利にし、戦争に使われた時は人々に悲劇をもたらしました。そのような功罪の結果、ノーベル賞が創設され、それが学問の世界の共通した世界目標となっています。ある国では国の総力をあげてその獲得を目指しています。そしてノーベルの恋敵が数学者だったのでノーベル賞に数学賞が用意されなかったという人間臭いエピソードは、数学好きの私から見ても微笑ましく感じられます。ダイナマイトが無くなることは想像できませんが、いつかそういう時代もやって来ることでしょう。でもノーベル賞までもが無くなるとは思えません。ノーベル財団の資金がたとえ枯渇してもどこからか援助の手が差し伸べられ、未永く続いていくと思われまふ。伝統と名誉を有し、幼少期より多くの人々が心から憧れるブランドはひじょうに強い存在なのです。

日本が取るべき金融政策はその埋もれた金脈を発掘し、グローバルスタンダードへと育てていく手伝いをする事です。「集中と選択」という言葉がよく唱えられますが、目利きと決断という泥臭い人間の嗅覚と勇気が無ければそれを達成することはできません。土台となる基礎技術を獲得することがより多くの国民をより長く幸せにする礎となるはずでふ。そしてそれで得た資金を活用し、次のキーとなる分野や領域に人材を投入していくという国家目標をきちんと掲

げるべきです。

夕暮れで人のまばらな邸宅跡は何かもの悲しげな気持ちにさせます。タイムマシンで数十年前に遡ればたくさんの人々が威勢よく動き回る場面に遭遇するのでしょうか。今は人ではなく、無数のアキアカネがその広い庭を静かに飛び回っています。活力を失ったものは自然へと還っていくのでしょうか。個人の才覚と運だけでは長期の繁栄は望めません。広い視野を持った人材を数多く育てていくことが経済の活性化につながり、国を豊かにすることになるのだろうと感じた瞬間でした。

